

お母ちゃん物語 中 松原澄子

お母ちゃん物語
中 松原澄子



松原澄子（まつばら すみこ）

1926年 和歌山県生まれ

1942年 神戸市明親高等小学校（現すさの中学校）卒

1942年 結核発病

1948年 岡山玉島市白銀山病院へ入院

1957年 岡山国立早島療養所退所

1950年 詩集『夜明けに遠く』（東和社出版）

1987年 童話『ぼくらはスカラベスク探偵団』（PHP 研究所）

1988年 第32回かわさき文学賞「すずの兵隊」

1994年 奈良県立高等学校通信課程入学

読書会記録感想文読売ブック賞受賞。1976年第3回『火宅の人』、1978年第5回『クオリティライフの発想』、1979年第6回『12歳のぼく』、1980年第7回『死の棘』。

現在 王寺町にて「本を読んで語る会」21年間の主宰終る。

同人誌『河馬』13号発行。「自分史を書く会」主宰10年、機関雑誌『大和川』17号発行中。

全国同人雑誌作家協会理事。

住所 〒636 奈良県北葛城郡王寺町葛下1-5-11

お母ちゃん物語

1994年8月31日 初版第1刷発行

著 者 松 原 澄 子

発行者 今 東 成 人

発行所 東 方 出 版 ㈱

〒530 大阪市北区西天満3-2-4

☎06(365)5421振替00940-9-20522

印刷所 日 本 電 植 ㈱

落丁・乱丁はおとりかえいたします。

ISBN4-88591-395-0

お母ちゃん物語 ● もくじ

一、 はじまり

7

二、 あつろうと弟

34

三、 ピアノ発表会

60

四、 宙太の話

87

夏休み 87

クリスマス 101

五、 パパ不在

114

エベレスト山より 114

パパ不在 119

少年院 129

金剛山 136

六、遊びをせんとて

153

泰山木 153

ただ乗り 168

音楽への道 188

七、弥次郎兵衛

196

自然体の達人

岩谷征捷 225

七月三十一日

松原澄子 228

お母ちゃん物語

一、はじまり

二十歳を過ぎたばかりの、少女っぽい容子さんの前で、

「子供を産もうと思っているんです。主人とあなたのおつき合いを眺めながら、子供を産むのは辛いのです」

お母ちゃんは、おどおどと口ごもりながら申しました。やっと捜しあてた容子さんの家は、岡山市の外れの樹木の多い静かなところでした。玄関脇の洋館風の事務所に通されましたが、そこは建築士のお父さんの事務所兼応接間で、世間知らずのお母ちゃんでも、「お父さんは立派な仕事をもっているらしい」

と、何不自由のない彼女のたたずまいを羨しく思いました。

容子さんは、自分より十二歳も年上の、身重で、すきだらけの女の、哀願に近い言葉を表情も変えずに聞いていました。そして、

「それでは、これからお会いしないようにしたらよろしいですね」と、まるでひとごとのように、無造作に言いました。

お母ちゃんは、とびつくような思いでその言葉を聞いたあと、じっとしてられないほどの恥

ずかしさが、身体中をかけめぐりました。

おかっぱ髪のこんな稚げに見える、そしてなんの不自由もなさそうな人に、何日も思いあぐね、命をかけるほどの大切な相談ごとを切り出したのに、ほんのひとことの軽いあしらいをうけたあと、黙って向き合っているより他に所在なかったからです。

お母ちゃんは、彼女にどれほど感謝せねばならないのかわからず、また彼女の心の中には、自分の夫の影などまるでなかったのに、それを見当違いしたのではなかったかと、腹部の重い体の置きどころもないほどの恥ずかしさを、哀れげな笑顔にまぎらわしました。

「ごめんなさいね。勝手なことばかり言いに来て」

「いいえ」

彼女は静かに頭を振って、玄関のドアをあけました。

お母ちゃんは、療養所を出て初めての子供を産むために、夫への万福の信頼が欲しかったのです。自分よりももういしく、華やかな女が出たり入ったりする夫の胸中を眺めながら、子供を産むことが耐え難かったのです。片肺の身で命がけで子供を産もうとすると、夫からもっと真剣に愛されていたかったです。

容子さんと別れて一人になると、なんとなく心が軽くなりました。

「やっぱり来てよかった。あの人はほんとにいい人なんだわ」

もっと早く彼女に会っておけば、こんなに苦しまなくてもよかったのに。

あんなに美しく、あんなにものわかりがよく、両親も揃って経済的にも豊かなお嬢さんなのだ。今のままであの人はなんにも不満はないのだろう。「夏になると痩せるのです」と言ってたけど、あの人に悩みがあるとすれば、たったそれだけに違いない。

「もう少し元気になれば、もっと幸せになるのになあ」

お母ちゃんは他愛のないことを呟いていました。

すつくと背のびた十六、七歳の、目の大きい容子さんを初めて見たのは岡山早島療養所の小児病棟でした。良家の子女がたおやかに病んでいる風情がありました。昭和二十年代の終り頃、独身だった夫は小児病棟の少年少女に毎週学課を教えていました。もうその頃、容子さんの恋愛相手の男の名が囁かれ、

「さすが、彼女は目が高いな」

噂の三十代の男はあかぬけた長身で、陰影のある雰囲気は遠くからでも目立ちました。

お母ちゃんが見る彼女は、ひたすら清純で幼い品位をただよわせているだけでした。あとで聞くと、彼女の二人の姉は恋を争って片方が自殺したということでした。貧乏と病気の他に、人生の何も知らないお母ちゃんが想像もできないほど、年若い彼女は恋愛の経験を持ち、愛の傷みや、女の誇りとするものの価値を知っていたのです。

そんな相手に、夫と会ってくれるなと頼みごとに行くのは、夫を売り渡しに行くようなものでした。

しかし、ずっと年下の彼女に、子供を産みたいのですと哀願した惨めさは、その後も忘れることはありませんでした。そして貴婦人のような表情でイエスと答えた彼女の姿は、いつまでもお母ちゃんの心に敗者の印を押し続けました。

昭和三十三年一月、岡山の大学病院の産科で、お母ちゃんは厚郎を産みました。

お母ちゃんが産院の病室にいるとき、ふいに容子さんがかたわらに立ちました。大きくくまのぬいぐるみとお祝いの言葉を携えて。思いがけない入来にお母ちゃんはとまどいました。

「よかったわね」

容子さんはやさしく言いました。

「たいへんだったでしょう」

お母ちゃんは頷きました。ひよつとしたら、かつての彼女への哀願と信頼のお蔭で、厚郎を産みえたのかも知れないと思いました。

やっぱり容子さんの心の中には、夫のことなどなにもなかったのかも知れないわ。もし、かつて何かゆれるものがあつたとしても、あんなにすっぱりと願いを聞いてくれたのだから。産後の安堵の中で、お母ちゃんは友情への感謝でいっぱいになりました。

「ほんとうに有難う。ちよつと待っていて下さいね。もうすぐ主人がやって来るはずですから」
「あら、そんなら私は、お目にかからないうちに失礼しますわ」

そそくさと帰っていった容子さんの後姿に、お母ちゃんは一層きよらかな善意を描きました。彼女はお母ちゃんのひたむきな願いを忘れず、彼から遠ざかってくれたばかりか、自分のことのように出産を喜んでくれたのです。

入れ違いに夫がはいって来たとき、

「今、容子さんが来てくださったばかりよ。廊下ですれ違わなかったかしら」と、尋ねました。

「いや、会わなかった」

「どうしてここで子供を産んだことを知ってたんかしらねえ。あ、そうそう、お祝いまで持ってきてくださったのよ。申し訳ないわ」

お母ちゃんは幸せいっぱいでした。

「ふーん、感激したんだろ、きつと。三十を過ぎた肺病上がりの女が、子供を産んだりしたもんだから」

こともなげな夫の言葉は、お母ちゃんの、心の中にとげのようにささりました。

十五年にも及ぶ青春のすべてを肺病やみについやして、やっと子供を産んだ今、わが夫からこんな破れぞうきんのようなあしらいを受けようとは思いませんでした。

そして、若くういいういしいお嬢さんとはいえ、何がしかの思いをこめて足を運んでくれた容子さんを、見世物でも覗きに来たように言い散らした夫の言葉に驚きました。



初めて子供を持った昂奮を、妻をさげすむような言葉でしか表現できない夫の心の品性にそのときお母ちゃんはこだわりました。

それとも、花のような若い女性に、ぞうきんのように疲れた産後の妻を見られたのが、矜持のたかい夫には恥ずかしかったのでしょうか。

酸素ボンベをかたわらに置いて、子供を産んだ妻を彼は素直に喜ぶことができなかったように、それほど深い関係もないはずのお母ちゃんの枕許へ、祝いの品をもってきてくれた容子さんの心やりも、彼は虚心に考えることはできなかったのでしょうか。そのときにはまだ容子さんに邪心がなかったはずなのに、ひょっとしたら夫は、まるで自分への贈り物かなにかのように勘違いし、彼女の好意をひどく仰山に感じてしまったかもしれません。

聞くところによると、容子さんの一番上の姉さんの自殺は、出産中に、自分の夫と二番目の姉さんとの間違いが原因だったそうです。女が子供を産む期間にはあり勝ちなことで、そんな危険に気付くことも知らなかったお母ちゃんは、荒野に放り出されてたちまち狼の餌食になるくらい、身を守るのが下手だったわけです。

そして、三十も過ぎて初めて子供を産んだ充足の中で、夫のうそ寒い心を見たことが、不幸せの始まりだったかもしれません。

同じ大学病院で、お母ちゃんは二年おいて宙太を産みました。

「まだ生きとったんか」

夫は宙太を産んで急にふくらみの消えたお母ちゃんのおなかを見て、歓喜と驚きで顔をゆがめました。

「ぼくは厚郎を残されてどうなるかと思った」

お母ちゃんは産院に入って三日間、殺風景な予備個室でうとうと眠り続けていました。毎日、塾教室の始まる前に立ち寄る夫の表情はだんだん陰しく焦立ってきました。

「まだ陣痛が始まらんのか」

わが家の便器へ夕立のように音をたてて破水がおこった夕方、タクシーで運びこまれた産室で、陣痛が微弱だとベッドに戻されました。

「時々、陣痛はおきるんやけど、続かへんねん」

そのたびに産室へ移され、またベッドへ帰されました。

「疲労がたまつてゐるから、ゆっくり寝てたら陣痛が出てくるんやつて。そやけど厚郎は泣いてへんかしら」

お母ちゃんは、隣家へ預けてきた厚郎のことばかり口走りました。

「今度のお産で死ぬかもしれん」

夫は日毎に悲痛な思いを募らせ、しだいに覚悟を強いられていくような思いだったそうです。

「ぼくの人生は、またしても悲惨につながる」

お母ちゃんは、たった二歳の厚郎をおいてどんなことがあつても死ぬわけにいきません。おいできぼりをくつたような分娩子備室で、たった一人、無痛分娩の本を読み、腹式呼吸や体操をしては眠りました。そしておなかの赤ちゃんに言いきかせました。

「お母ちゃんはもうすぐ元氣が出てくるからね、そのとき、出ておいで」

破水して水も少なくなつたおなかの中で、赤ちゃんはいつたい何をしているのか。時々やつてくる陣痛は軽く、お母ちゃんはすぐうとうとと眠りました。

「三千七百グラムの大きな赤ちゃんだつて。今までこんなすごい声で泣く赤ちゃんはいなかった
そうよ」

夫は急いで病室を出て行くと、買物かごをいっぱいにして帰つて来ました。床頭台の上に、い